



一般社団法人 大学英語教育学会 (JACET)

The Japan Association of College English Teachers

第 35 回 (2020 年度) 中部支部大会プログラム

The JACET 35th (2020) Chubu Chapter  
Annual Convention Program

オンライン時代における大学英語教育

College English Teaching in the Online Education Era

Invited Speakers

Dr. Haedong Kim

(Hankuk University of Foreign Studies, Korea)

Dr. Junju Wang

(Shandong University, China)

September 12 (Saturday), 2020

Online Convention

10:30 — 16:00

<http://www.jacet-chubu.org/>

# The JACET 35th (2020) Chubu Chapter Annual Convention

## 大学英語教育学会 第35回(2020年度)中部支部大会

### College English Teaching in the Online Education Era

#### オンライン時代における大学英語教育

●日時 Date: September 12 (Saturday) 2020 10:30–16:00

●場所 Site: Zoom

開会 Opening 10:30

●Room 1 中部支部長 石川有香 (名古屋工業大学) ISHIKAWA, Yuka

●Room 2 中部支部副支部長 佐藤雄大 (名古屋外国語大学) SATO, Takehiro

Session 1-5

●Room 1 Research Paper/Case Study Presentations

●Room 2 Case Study Presentations

●Room 3 Presentations in English

閉会 Closing 15:10

●Room 1 石川有香 ISHIKAWA, Yuka

●参加事前登録制 Registration Needed

●Program

Time		Room 1	Room 2	Room 3
		Opening	Opening	
10:30–11:00	Session 1	Presentation 1	Presentation 6	
11:00–11:30	Session 2	Presentation 2	Presentation 7	Presentation 11
11:30–12:00	Session 3	Presentation 3	Presentation 8	Presentation 12
Lunch				
13:00–13:30	Session 4	Presentation 4	Presentation 9	Presentation 13
13:30–14:00	Session 5	Presentation 5	Presentation 10	Presentation 14
Break				
14:10–14:40	Special Lecture 1	Dr. Haedong Kim		
14:40–15:10	Special Lecture 2	Dr. Junju Wang		
		Closing		
15:30–16:00	Info Exchange	Breakout Room		

JACET Chubu Chapter: <http://www.jacet-chubu.org/>

## Session 1

10:30-11:00

### Room 1 Presentation 1

司会: 石川有香 (名古屋工業大学)

日本人英語学習者向け一貫性・結束性判断課題の項目分析と内容的妥当性の検証 (p. 5)

藤田 賢 (愛知学院大学)

### Room 2 Presentation 6

司会: 佐藤雄大 (名古屋外国語大学)

中部大学におけるオンライン全学英語教育の取り組み—教員間連携に焦点をあてて— (p. 6)

今村 洋美 (中部大学)

大門 正幸 (中部大学)

## Session 2

11:00-11:30

### Room 1 Presentation 2

司会: 大石晴美 (岐阜聖徳学園大学)

情報工学分野の論文要旨の日英の語連鎖分析 (p. 5)

石川 有香 (名古屋工業大学)

### Room 2 Presentation 7

司会: 三上仁志 (中部大学)

オンライン授業による「英語コミュニケーション」の実践と課題 (p. 7)

松家 鮎美 (岐阜女子大学)

### Room 3 Presentation 11

Chair: GILNER, Leah (Aichi University)

Difficulties Teaching Listening Online (p. 8)

JONES, Marc (Tokyo Kasei University)

## Session 3

11:30-12:00

### Room 1 Presentation 3

司会: 梁志鋭 (豊橋技術科学大学)

CEOプロフィールのディスコース分析 (p. 5)

仁科 恭徳 (神戸学院大学)

### Room 2 Presentation 8

司会: 安達理恵 (椋山女学園大学)

ZOOMを用いたジグソーディスカッションの可能性 (p. 7)

佐藤 雄大 (名古屋外国語大学)

### Room 3 Presentation 12

Chair: FUJIWARA, Yasuhiro (Meijo University)

*Get by in English* Series: Fresh Insights (p. 8)

NUTT, Julyan (Tokai Gakuen University)

MARSHALL, Michael (Tokai Gakuen University)

KURAHASHI, Yoko (Tokai Gakuen University)

MIYATA, Manabu (Nagoya City University)

**Session 4** **13:00-13:30**

**Room 1 Presentation 4**

司会: 大石晴美 (岐阜聖徳学園大学)  
英語連語表現定着におけるシャドーイングの効果—学習者熟達度および教材難易度の検討(p. 6)

邢 云(名古屋大学大学院生)  
橋崎 諒太郎(名古屋大学大学院生)

**Room 2 Presentation 9**

司会: 佐藤雄大(名古屋外国語大学)  
Zoom 授業でできることとすべきこと (p. 7)

澁井 とし子(東京福祉大学)

**Room 3 Presentation 13**

Chair: YOSHIKAWA, Lisa (Nagoya Institute of Technology)  
Analyzing Teachers' Perceptions for Teaching English Online (p. 9)

OGAWA, Chie (Kyoto Sangyo University)  
LEE, Nancy (Osaka University)

**Session 4** **13:30-14:00**

**Room 1 Presentation 5**

司会: 石川有香 (名古屋工業大学)  
音声付きスライドと LINE を利用した講義と英語学習ハイブリッド授業の実践—言語習得論と国際英語論の観点から—(p. 6)

塩澤 正(中部大学)

**Room 2 Presentation 10**

司会: 安達理恵(椛山女学園大学)  
Glexa を利用した課題提示型オンライン授業の実践 (p. 8)

上野 之江(北海学園大学)  
品田 淳智 ((株)VERSION2)

**Room 3 Presentation 14**

Chair: FUJIWARA Yasuhiro (Meijo University)  
Explicit Corrective Feedback Training to University Students in Peer Interaction (p. 9)

SHIMADA, Shonosuke (Meijo University (Student))

**Special Lecture 1** **14:10-14:40** **Room 1**

**Special Lecture 2** **14:40-15:10** **Room 1**

**Information Exchange Session** **15:30-16:00** **Room 1**

## Session Abstracts 発表要旨

### Presentation 1 (Japanese) Room 1 (10:30-11:00) Research Paper

日本人英語学習者向け一貫性・結束性判断課題の項目分析と内容的妥当性の検証

#### The Analysis of Test Items and Content Validity of Coherence and Cohesion Judgement Task for Japanese EFL Learners

藤田 賢 (愛知学院大学)

本研究は、一貫性・結束性判断課題について、項目分析を行い、その内容的妥当性を検証することを目的とする。発表では、まず、藤田 (2019) で使用した英語での一貫性・結束性判断課題の作成の経緯を振り返りまとめる。次に、藤田 (2020) の日本語での一貫性・結束性判断課題 (96 項目) の量的な項目分析を行い、正答率の低い項目について、その内容的妥当性を 1 項目ずつ質的に検討した結果を報告する。日本人大学生 44 名の参加者の正答率は、テスト全体で .88 であった。正答率が 80%未満であった項目 (15 項目) について、2 名の専門家により、テスト項目を精査し、必要に応じて項目の改正作業を行った。こうして、日本人大学生にとってより妥当性の高い一貫性・結束性判断課題を完成させた。教室での読解指導では、一貫性・結束性の構築のためには、背景知識や推論生成が成功するかどうかことが重要であることが示唆された。

### Presentation 2 (Japanese) Room 1 (11:00-11:30) Research Paper

情報工学分野の論文要旨の日英の語連鎖分析

#### An N-gram Analysis of Japanese/English Article Abstracts in Computer Science

石川 有香 (名古屋工業大学)

近年、工業系大学では、学位論文要旨の執筆言語を英語に限定する動きが加速してきている。一方で、英語教育の整備が遅れ、英語論文要旨執筆の経験がないままに学位論文作成に取り掛かる学生も多い。論文執筆用教材に関しては、Academic PhraseBank (Morley, 2013) など、上級者用教材は複数開発されてきたが、初級学習者用の教材は数が少ない。本研究の目的は、日本語で工学研究を進めている初級学習者を対象に、英語要旨の典型的構造と表現を日英両語で提示する、信頼性の高いオンライン教材の開発である。そのため、発表者は、これまでに、日本語で執筆された修士論文の英語要旨を分析してきた。情報工学分野においては、大学院生と研究者との言語使用の差が比較的小さいことが分かったため、本発表では、情報工学分野に焦点を当てて分析を行う。研究者による日本語要旨と英語要旨を対象に語連鎖を抽出した結果、「(本研究で) 提案された手法は」など、頻度の高い日本語の語連鎖を、英語の高頻度語連鎖に対応させることができた。今後の課題は、分析分野の拡張と提示方法となる。

### Presentation 3 (Japanese) Room 1 (11:30-12:00) Research Paper

CEO プロフィールのディスコース分析

#### Is an Impressive Background so Important to a CEO? Investigating the Move Structure of Personal Profiles in the Business Field

仁科 恭徳 (神戸学院大学)

起業した現役大学生や元指導生など初・中級の英語学習者から、英語のプロフィール作成に関して何回かアドバイスを求められたことが本研究の出発点である。プロフィールというジャンルは、TOEIC のリーディングセクションでも頻出し、ビジネス英語の中でも特に読み・書きにおいて重要なジャンルであるが、先行研究は少なく、その構造や言語特徴も未だ詳細に解明されていない。そこで、本発表では、航空会社 28 社の CEO のプロフィールを収録した Small-sized DIY コーパスを用いて、このジャンルの言語的特徴や、特定の情報伝達機能が認められるムーブの特定、そのムーブから構成されるディスコースのムーブ構造分析の結果を報告する。特に、CEO プロフィールには、prior position, start of career, academic qualification, award など 15 種類のムーブが

存在し、過去や現在における職階や学歴、起業に関するムーブが慣例的に使われていること、各ムーブで好まれる時制が異なること、典型的なムーブ構造では現在→過去→近過去→現在の順に構成されること、ムーブによってはかなり固定された言語パターンが用いられていることなどをデータと共に示す。最後に、これらの調査結果を元にプロフィール作成のための雛形を教授用資料として作成し活用することで、対象者へ自信を持って英語のプロフィール作成指導ができることを提案する。

**Presentation 4 (Japanese) Room 1 (13:00-13:30) Student Member • Research Paper**  
**英語連語表現定着におけるシャドーイングの効果—学習者熟達度および教材難易度の検討—**  
**The Effect of Shadowing on the Memorization of Multiword Units: From the Perspective of Learners' Proficiency and Material Difficulty**

邢 云(名古屋大学大学院生)

橋崎 諒太郎(名古屋大学大学院生)

門田 (2007) によると、シャドーイングには第二言語におけるリスニング能力向上や、連語表現などの新規学習項目を記憶に定着させる効果がある。この2つの内、前者においては効果の検証が行われており、使用する教材のレベルや学習者の熟達度が効果に影響を与えることが明らかになっている。一方で、後者においてはそれらの影響は明らかでなく、効果検証も十分ではない。したがって本研究では、中国人英語学習者34名を対象に9つのレベルの多読教材を用いてシャドーイングを実施した後、連語表現の定着を測定した。結果、教材難易度が上がるにつれて学習者はより多くの連語表現を記憶し、また熟達度が高い学習者は熟達度が低い学習者よりも多くの連語表現を記憶に定着できることが明らかになった。教育的示唆としては、このような連語表現が記憶定着することにより、流暢な言語使用が可能となる (Pawley & Syder, 1983; Yan, 2019)。

**Presentation 5 (Japanese) Room 1 (13:30-14:00) Case Study**

**音声付きスライドとLINEを利用した講義と英語学習ハイブリッド授業の実践—言語習得論と国際英語論の観点から—**

**Analyzing Feedback on Hybrid Online Courses with Lectures on Applied Linguistics and English Learning Using Audio Slides and LINE—A World Englishes View**

塩澤 正(中部大学)

手探りで始まった遠隔授業であったが、予想外に受講生の評価は高かった。本発表は、受講生のコメントをもとに、その要因を言語習得論と国際英語論の観点から考察するものである。調査対象とした2つの授業は、講義と英語学習が混在する「応用言語学」と「国際英語論」をテーマとした授業である。前半の講義に続き、その応用としてアウトプットを中心とした英語学習に取り組んだ。学習者は、LMS(学習支援システム)上で、音声付きのスライドで講義内容を学んだ後、応用として英語教材を自習し、質問に英語で答え、LINEで音声ファイルを発表者まで提出した。受講生合計91名からのコメントから、素早い個人的なフィードバック、自分に関する発話を直接的に教員に聞いてもらえること、スライド作成に学習者自身が関わっていたこと、「自分の英語」への自信の高まりなどが、高評価に繋がっていることが示唆された。

**Presentation 6 (Japanese) Room 2 (10:30-11:00) Case Study**

**中部大学におけるオンライン全学英語教育の取り組み—教員間連携に焦点をあてて—**

**Online English Education at Chubu University: Focusing on Teacher Cooperation**

今村 洋美(中部大学)

大門 正幸(中部大学)

本発表は、中部大学での全学共通英語必修科目の授業をオンラインで実施した実践報告である。各学部の要望を踏まえ、一般学術目的の英語(English for General Academic Purposes, EGAP)を教授対象とすることを基本方針とし、読解方略に重点を置いた読解指導、EGAPを意識した語彙指

導と文法指導を柱とした授業を行ってきた。2020 年度に急遽行うことになった新1年生 64 クラス約 2,500 名に対するオンラインによる英語必修授業を、教員用に作成した授業実施マニュアルや授業用プラットフォームに関する説明動画、授業用教材の提供等によって、教員がいかに連携して実施できたかを報告するとともに、今後大学英語教員がオンライン教育をおこなっていく上での参考として、担当教員に実施したアンケートから明らかになった、対応策として効果的だった点や、今度克服すべき課題として残された点についても報告する。

### **Presentation 7 (Japanese) Room 2 (11:00-11:30) Case Study**

#### **オンライン授業による「英語コミュニケーション」の実践と課題**

#### **English Education Online through the Case of English Communication Class for Freshmen**

松家 鮎美 (岐阜女子大学)

新入生 35 名を対象とした「英語コミュニケーション」の授業で、前半 7 回をオンライン(Zoom)、後半 8 回を対面で行った。開講時は 9 割が英語を苦手とし、授業は「文法」と「読解」を中心に、オンラインでは従来の対面講義内容に画像や動画を加えて行った。オンライン終了時に学生の意識を調査した結果、英語を苦手とする割合に変化はなく、授業方法の改善が必要と分かった。そこで、後半の対面講義では毎回、学生全員から「分かったこと」「分からなかったこと」の具体を集約し、翌週の授業で理解を深めるようにした。その結果、学期末には、苦手意識が 6 割に減り、オンライン授業でのこまかなフォローの必要性がさらに分かってきた。

### **Presentation 8 (Japanese) Room 2 (11:30-12:00) Case Study**

#### **ZOOM を用いたジグソーディスカッションの可能性**

#### **Potentials of Jigsaw Discussion in ZOOM Classes**

佐藤 雄大 (名古屋外国語大学)

今まで認知科学の知見を教室学習へ応用した実践方法「知識構成型ジグソー法」(1 つのテーマに対して異なった情報を熟知した学生がグループを構成し、ディスカッションすることでそのテーマの理解を深めるグループ活動)を英語授業へ応用する実践を行い、その方法や効果を検証してきた。この 4 月から全面的オンライン授業となる中でこのジグソー法がオンライン授業でどのように実施できるかということ ZOOM を利用して模索してきた。教授者、学習者ともに ZOOM に慣れるにつれブレイクアウトルームを用いることでジグソー法で行われる二つの主要セッション(エキスパートセッションとジグソーセッション)がかなり容易に実施できることが分かってきた。今期は ZOOM によるジグソー法実践の模索が中心となり、英語を用いた実践が行えなかったが、今回行った実践方法の共有と英語授業での活用方法について提案したい。

### **Presentation 9 (Japanese) Room 2 (13:00-13:30) Case Study**

#### **Zoom 授業でできることとすべきこと**

#### **What Can We Do and What Should We Do in Zoom Classes?**

澁井 とし子 (東京福祉大学)

教育学部の学生に英語の授業をオンラインで行った。研究目的は①双方向の授業を実践するためにオンラインでどのような指導が可能か、②学生の気づきを分析し、今後の授業目標を明確にする、ことである。Zoom のブレイクアウトセッションを活用した授業とチャットを使用した毎回の学生の振り返りから教員が学生の英語学習への気づきを拾った。結果、教員は学生の英語使用の機会をいかに多く作れるのかが必要だとわかった。なぜならば、学生は英作文ができるだけでは会話で言いたいことが言えず、小学校教員は授業中に英語でのやり取りや児童の発話に対応できる生きた英語力が必要とされているからである。授業でのディスカッション等を通し、学生は「自分の考えを伝えるためにはもっと語彙を増やしたい。」「話すことが意外と難しい。」という気づきが生まれたので、今、教職課程の英語教員にはそれらの英語力の養成が求められている。

**Presentation 10 (Japanese) Room 2 (13:30-14:00) Supporting Member • Case Study**  
**Glexa を利用した課題提示型オンライン授業の実践**  
**A Report on Online Classes Using Glexa**

上野 之江 (北海学園大学)  
品田 淳智 ((株)VERSION2)

研究目的:2020年5月よりコロナ禍の影響で授業がオンラインになった。発表者は Glexa (Version2) が開発した従来の LMS 学習機能に加え、コミュニケーションやポートフォリオ機能が強化された e ラーニングシステム) を利用し課題提示型の授業を通常の授業時間に実践した。6月中旬に実施した授業アンケートでは学生は肯定的な反応だった。この発表では、発表者のオンライン授業実践と学習者の回答を元に、Glexa を利用したオンライン授業の利点、オンライン授業の特徴、考慮すべき点などを考察する。方法:英語ライティング(34名)、英語特講(TOEIC(43名)、英語コミュニケーション(8名)のオンライン授業の紹介と授業アンケート分析をする。結果:50名から回答があり、概ねオンライン授業についてポジティブな反応だった。考察:今回発表者は Glexa の機能を全面的に利用することになりその有用性が認められた。出席管理、アクセス数の確認、教材作成、メール機能を駆使して通常の対面授業と同じような臨場感で授業を進めることができた。学生からも同様の感想があった。対面授業とオンライン授業の良さを確認し、オンライン授業の注意点などを考察し後期の授業に生かしたい。

**Presentation 11 (English) Room 3 (11:00-11:30) Case Study**  
**Difficulties Teaching Listening Online**

JONES, Marc (Tokyo Kasei University)

This presentation aims to highlight problems that may be faced by teachers when teaching listening online remotely, either synchronously or asynchronously. Problems include (but are not limited to) desynchronisation resulting in McGurk effects (for example video playing a face saying /b/ while audio plays /d/ can result in the perception in listeners of /g/), overreliance on subtitles with YouTube videos and other materials, and also sound disturbances when using online meeting software. Drawing on literature regarding listening pedagogy, phonology and also neuroscience, the presenter takes an autoethnographic approach with practical focus, examining problems and potential solutions. Learner autonomy is explored as a solution, as well as the limitations of this, particularly regarding lower-proficiency students.

**Presentation 12 (English) Room 3 (11:30-12:00) Supporting Member • Case Study**  
**Get by in English Series: Fresh Insights**

NUTT, Julyan (Tokai Gakuen University)  
MARSHALL, Michael (Tokai Gakuen University)  
KURAHASHI, Yoko (Tokai Gakuen University)  
MIYATA, Manabu (Nagoya City University)

*Get By in English* is a basic, four-skill English textbook series focusing on conversation, which is aimed at non-English majors. It has been produced with the needs of Japanese university students in mind, based on the authors' experience of students' limited retention of vocabulary and improper grammar usage. The series is composed of four books to meet different English proficiencies. Each textbook includes a variety of activities such as pair work, listening comprehension, grammar practice and personalized speeches. The authors will explain how the book is used and how they adapted it to online classes, and finally reveal students and teachers' satisfaction with the communication activities.



**Presentation 13 (English) Room 3 (13:00-13:30) Case Study  
Analyzing Teachers' Perceptions for Teaching English Online**

OGAWA, Chie (Kyoto Sangyo University)  
LEE, Nancy (Osaka University)

This study examined university teachers' perceptions for teaching English online. The rapid transition from face-to-face to online teaching in 2020 has caused many teachers to start teaching online without proper training, preparation, and support. An online survey was administered to 138 university English teachers in Japan to examine how they perceive themselves teaching online. Teachers' pedagogical, technical, communicative language teaching, and self-management efficacies for online teaching were examined using 30 items. In addition, Rasch analyses were conducted to examine multi-dimensionality of these four latent constructs. Results indicated that university teachers are self-efficacious in online teaching but they do not feel capable about their time- and self-management. In particular, teachers do not feel capable about balancing the demands of teaching and research when teaching online. This study concludes with pedagogical implications for teachers making a more effective transition to online teaching. Self-management faculty development for online teaching is indispensable.

**Presentation 14 (English) Room 3 (13:30-14:00) Student Member • Research Paper  
Explicit Corrective Feedback Training to University Students in Peer Interaction**

SHIMADA, Shonosuke (Meijo University (Student))

This experimental study is aimed at explicitly teaching learners how to provide corrective feedback (CF), especially prompts during peer interaction and assessing the number and the type of CF techniques. Twenty-three third-grade students majoring in English participated in this study and were grouped into either a control group (CO) or an experimental group (EX). Both groups were given storytelling tasks as a pretest and a posttest. Students in the EX group were taught how to give CF techniques. Analyses of the pretest and the posttest showed that the EX group provided a great number of CF whereas the CO group showed less CF production. The findings suggest that CF training could be applied to English classes to improve learner's productions and their language awareness.

## Special Lecture 1

### A New Normal in Tertiary English Education in Korea in the COVID-19 Era

Haedong Kim

(Hankuk University of Foreign Studies, Korea)

#### Abstract

This presentation aims to describe the effects of a specific educational policy and an unexpected pandemic situation on tertiary English education in Korea in 2020. In literature about educational change, a particular policy on curricula, syllabuses, materials, teaching and/or testing in certain ELT contexts is considered to be a powerful stimulus. In Korea, the policy on criterion-referenced testing in English for the college entrance examination, the College Scholastic Ability Test (CSAT), has had a negative impact on English education at the secondary and tertiary level. The policy may have led secondary school students to assume that the English exam has become a relatively easy test. The results of the CSAT revealed that the number of the highest-level test-takers was 52,893 in 2018 and 27,942 in 2019, indicating 10% and 5% of all test takers in each year. This means a very low level of discrimination power as a subject for the university entrance exam. Coincidentally, there has been a gradual decrease in the number of English-related majors at universities in Korea; from 8,826 (100%) in 2014 to 6,548 (74%) in 2018, indicating a 26% decrease. Another strong impact in English education in Korea has been made by the global outbreak of COVID-19. The unexpectedness was a tough challenge for students, instructors and schools at the beginning of the spring semester in 2020; unexpectedly, they were forced online for English education. The results of a small scale survey conducted in May at a university to check the possibility of offline learning showed that only 16% of the 385 students preferred face-to-face classroom learning. A survey conducted in July at the same university revealed that 56% of 127 students answered that online classes were less effective than offline. The analysis implies that although students become familiarized with online learning via educational technology, they still hope to return to the face-to-face environment. It seems likely that the possibility of using blended on and offline learning will increase, and this can be the new normal for English classrooms. We are yet not sure if blended learning will turn out to be very successful. However, greater emphasis should be given to estimating the effect of a certain educational policy and the experience of using new tools in an ELT context.



#### Biodata

Haedong Kim is a professor of English language teaching in the Graduate School of Education at Hankuk University of Foreign Studies in Seoul, Korea. He was a former president of Korea Association of Teachers of English (KATE) until July 2020. His current research interests include ELT materials, testing and curriculum.

## Special Lecture 2

### New Reforms of Higher English Education in China

Junju Wang  
(Shandong University, China)

#### Abstract

The talk will present an overview of what is happening in China regarding English education reform. It will first review the guiding theories and principles that such reform follows, which include outcome-based education, learning-centered approach, whole person education, etc. Then it will introduce some major guidelines and standards that have been newly released by China's Ministry of Education. Specifically, it will elaborate on four national documents including *Guidelines of English Education for Undergraduate English Majors*, *Guidelines of English Teaching for Non-English Major Undergraduates*, and *China's Standards of English Language Ability*. These standards and guidelines involve English education at tertiary level, for both English-major and non-English major students, and for both teaching and assessment. Curriculum design, textbook compilation, classroom teaching, as well as tests and examination will be administered within the framework set by the above-mentioned documents of authority. It can be predicted that all these documents will supervise, monitor, and lead the English language teaching and education in China for at least a dozen years. This talk finally point out that the above-mentioned documents are to build up a system that aims at improving students' all-round development in knowledge, skills, ability, and competencies. From a more macroscopic view, the goal of the undergoing English education reform in China is to cultivate talents that can meet the upgraded requirements of social development, and the expectations imbedded in the fundamental questions of "what talents to cultivate, how to cultivate, and for whom talents should be cultivated".



#### Biodata

Junju Wang is Professor of Applied Linguistics and Dean of the School of Foreign Languages at Shandong University, China. Her research interests include second language writing, EFL teaching and learning, and EFL teacher development. She is the author and editor of a dozen books, and her over 70 published articles appear in both domestic and international journals.

JACET 中部支部紀要編集委員会からのお知らせ

『JACET 中部支部紀要』第 18 号 投稿原稿募集

締切り:2020 年 9 月 10 日(必着)

投稿方法等の詳細については紀要の投稿規程およびホームページでご確認下さい。

問合わせ先: JACET 中部支部事務局

豊田工業大学 伊東田恵研究室内

tae@toyota-ti.ac.jp